

佐々木現順著

「佛教心理學の研究」出版の意義

舟橋 一哉

阿毘達磨佛敎——「小乘佛敎」というてもよい——の教義を組織的に纏めて述べようとする場合、従來、ほとんど北傳の阿

毘達磨のみをとり上げて、南傳の阿毘達磨には餘り注意が向けられなかつた。そして北傳の阿毘達磨の中でも、とくに有部の教學を、その有部の教學も専ら俱舍論によつてこれを述べる、というのが大體昭和十年頃までの常識であつたようである。それは俱舍論の研究には古い傳統があつて、インド・シナ・日本の三國にわたるところの、その精致を極めた註釋的研究の堆積は、われわれに勞せずして阿毘達磨佛敎の一つの代表的な型を理解させてくれたからである。その頃出版せられた木村泰賢博士の「小乘佛敎思想論」が、いかに北傳有部の教學の解明にその力の大半を費しているか、ということを考えて見ればこの間の事情は大體想像できる。そしてこのことは、現在においてもやはり基本的な線においては變化はない。

北傳の阿毘達磨佛敎の中で、有部以外の部派の論書は殆ど傳わつていないのであるから、これは研究しようと思つても資料がない。ただ異部宗輪論のような、有部所傳の論書の中に紹介

せられているわずかな資料によつて、これを見てゆくより他に方法はない。ところが南傳の阿毘達磨は、豊富な資料をかかえながら、従來殆ど研究せられていなかつた。例えば前述の「小乘佛敎思想論」で南傳の阿毘達磨の教義を紹介するときには、大低の場合、阿毘達磨義論の英譯に據つているが、この論はずつと後世のものであつて、大體西紀十二世紀頃であらうとせられている。そして分量からいつても、ほんの一小篇にすぎず、南傳の阿毘達磨の教義を巧みに纏めて説いてはいるが、何といつても南傳阿毘達磨を代表する資格をもつているとは見なしたい。

それでは南傳の阿毘達磨の教義は、どのような資料の上にこれを伺うべきであるかという、卒爾に考えるところは所謂南傳七論といわれるような諸論書である、と思ひやすいのであるが、實はそうではなくて、時代からいともう少し下つて、西紀五世紀、佛音 (Buddhaghosa) の教學の上にこれを伺うべきであると思われる。南傳佛敎では論藏——すなわち阿毘達磨藏——といえは七論に限るのであつて、それ以外の論書は論藏の中に含めてはいない。所謂藏外で、三藏以外の典籍と見なされている。このような點を北傳の有部と比較して見るとき、そこに大變な相異を見出す。有部では世親の俱舍論も、衆賢の顯宗論も、すべて論藏とせられている。このような相異は、論藏をも含めて三藏すべて佛説である、というのを建前とする南傳の立場と、經・律・二藏は佛説であるが、論藏は必ずしも佛説ではない、というのを建前とする有部の立場との相異から、必然的に由來するところである。それ故に、有部の教學を纏めて述べ

ようとするならば、どうしても大毘婆沙論・俱舍論まで下らなくしてはならないのと同じで、南傳佛教の教義を組織的に述べようと思うならば、どうしても佛音まで下らなくてはならぬ。そういう意味からいうならば、南傳の七論は有部の六足論に相當する位置にある、といつてよい。

南傳阿毘達磨の教義は、佛音によつて始めて組織的に纏めて述べられることとなつた。それはすなわち清淨道論である、だから南傳の阿毘達磨の教義を解明するためにはまず清淨道論を第一にとり上げなくてはならないが、これを補うものが、同じく佛音の作とせられているところの法集論註と分別論註とである。これら三書は、分量からいつても大體同じくらいのものであり、取り扱っている範圍も幾らか重複しているところもあつて、どうしても、これら三書をもつて南傳阿毘達磨のテキストとしなくてはならない。前述の攝阿毘達磨義論の如きは、この清淨道論を要約してその綱要を示したものと見られる。佐々木現順教授によつて全卷和譯せられた法集論註が、今回刊行せられた「佛教心理學の研究」の大部分をうめているのである。

この法集論註は、曾つて赤沼智善先生から講讀して頂いたことがあつた。そのとき私も本書の著者とともにその講筵にうつなつたが、先生はバーリ・テキスト・ソサエティー本を底本とし、シャム國皇室版を参照しつつ讀まれたことであつた。ところがこのテキストはまことに不完全なもので、シャム版と合せると、ときには一頁近くも脱落があつたりして、到底そのままで讀み切れるものではなかつた。けれどもその後著書はインドにおいて、パット博士から、更に完全なテキストを與えられ

た。このことが著書をしてこの和譯を完成させる機縁となつたようである。この書は、パット博士によつてデーヴァナガリ字體をもつてインドから出版せられている。

それで佐々木教授はまず、パット本によつてこれを和譯し(五三七頁)、これに「研究序説」(一一五頁)を加えて一書を構成した。「研究序説」はこの法集論註の研究の手引の役目をなすもので、とくに南傳の阿毘達磨にはじめて接する者のために懇切な解説を附し、この論註が主として扱つている問題——佛教心理學——についてその概要を示し、著書佛音に對する疑義と、佛音の傳記などについて述べている。

本書の出版によつて、南傳の阿毘達磨の研究は一段と進展したことになる。この上は、分別論註の和譯刊行と、更に清淨道論——南傳大藏經の中で水野弘元博士によつてすでに和譯せられている——を加えた三書の綜合的研究によつて、南傳阿毘達磨の教義の全貌が明かにされることが期待せられる。(A5七頁四頁・昭和三十五年三月・日本學術振興會發行・千圓)

PROCEEDINGS IXTH INTER-
NATIONAL CONGRESS FOR
HISTORY OF RELIGIONS TOKYO 1968

大屋 憲 一

一九五八年八月二十八日、東京で開會された第九回國際宗教學宗教史會議は、東京に於ける本會議、シンポジウムの後、日光、鎌倉、伊勢、奈良、京都等の日本に於ける宗教文化センタ